

「キャンパス建築の公開性」に関する研究と実践

キャンパス内ネットワーク構築のためのコモンスペースの構成について

岩崎克也 / 東海大学工学部建築学科教授



□研究の背景

今、キャンパスは次の時代を見据えた変革が求められている。政治的改革をきっかけとして、長年、狭隘な敷地の中で硬直化していた都心キャンパスを再編しようという動きが進んでおり、近年、都市と大学の関係が変化するなかで「キャンパスを都市に開く」というあり方に変わりつつある。

□研究の概要と方法

本研究では、キャンパスの街路をはじめとする外部空間と建物エントランス、エントランスホールとの関連を調査し、キャンパスの公開性を明らかにして、研究・設計に繋げることを目的とする。調査対象はデータベース、紙面媒体を中心とした研究調査を行った。2010年1月—2020年6月の間、建築専門誌「新建築」に掲載の大学建築の中から、計116件を今回の研究の対象とした。本研究では、下記の3つのポイントに整理して分析・考察を行いその内容を記述した。（下記は記述の抜粋）

1. エントランスとコモンスペースの街区への開放性

・55%が複数街路・外部に人のネットワークを形成 32(内部のみ)+32(内外連続)/116

2. コモンスペースの構成と外部への延伸性との関連

・コーナーアクセスタイプ（隅入り）（C型・D1型・K型 32/116）が全体の27.5%

全体の60%がコモンスペースを敷地コーナーに配置し、街路・外部に開放((36+34)/116)

3. コモンスペースと公開機能による建築構成

・東京理科大学葛飾キャンパスを実践事例としてコモンスペースの階層的な連続性を考察

□まとめ

半数を超える建築がキャンパス街区や隣接する建築に対しての接続を試みていることを明らかにした。また、キャンパス内のネットワークを形成するためには、街区とへの開放面の数、複数の出入口、これらを結ぶ外部、内部のコモンスペースの配置の組み合わせの傾向を把握した。また、外部・内部の多目的コモンスペースと隣接した特定用途コモンスペースとの隣接関連は、大学内部の活動を外部に発信し外部との積極的な交流を図りキャンパスの公開性を高める要素となることを明らかにした。